

口寂しき日々に。

PRD2

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

283プロのアイドルがプロデューサーとイチャイチャしたり、妄想したり、色々する話。

かなり性的な要素を含むと思うので注意。多分健全。

シヤニマスキャラへの多大な妄想を含むため、駄目そうならプラウザバツク。それでもよければどうぞ。

そんなことよりシヤニマスの二次創作増えろ。増えてください。お願いします。

杜野凜世

01

目次

1

杜野凜世 01

「…………おや？」

何でもない平日の事務所。

平時の賑やかさはどこえやら、と言わんばかりに閑散とした事務所で、杜野凜世はふと声を漏らした。

視線の先には彼女の担当プロデューサーのデスクがあった。パソコンのディスプレイを囲むようにファイルや紙の資料が綺麗に整頓されていて、生真面目な彼の性格の良く読み取れる机だった……が、それに対抗するように目立つように置かれた人形やヌイグルミ、小さなサボテンや何故か造花の入った花瓶、手作りのメダルや挙げ句の果てには綺麗に磨かれた石ころなど、雑多な物が机を所狭しと占拠していた。辛うじてキーボードを使える程度には開けているのが、救いでも言うべきか。

ただ、それ自体はいつも通り。

きっと彼を慕う——それこそ凜世のようなアイドル達が渡したそれらを、彼はなるべく側に置くようにしていた。せっかく貰ったものを、机の中に仕舞い込んでしまうのも何だから、と笑う彼の姿に凜世は何度も笑みを溢こぼしたものだ。

問題はそちらではなく、その手前。

机というよりは、椅子の方。

「これは……プロデューサー様の……」

埃を払いつつ手に取るは——黒いスーツ。

時は既に春。朝風に吹かれて肌寒いと感じる気候ではあるが、日が上ればそれも和らぎ、陽気な光が天から差す季節。長袖の生地の高いスーツなどを着ていれば、熱気が籠こもって不快になって、脱ぐこともあるだろう。

「……………忘れ物、ですわね」

凜世が化粧品CMの収録を終え、この事務所に戻ってきたのはつい先ほどのこと。現場から事務所に戻って来たのは、一度事務所に置いてきていた自分の学生鞆たもとを取るためだった。

一度来ていた事務所に取りに行くくらいなら、始めから現場まで荷物を持っていけば良かったと、車を走らせてくれたプロデューサーに申し訳ないと感じていた凜世だったが——彼もまた、忘れ物をしていたというのなら、それもまた行幸ということだろう。怪我の功名、という言葉はきつと今のためにある。

「……ふふっ」

思わず、口許が綻ほころんだ。

鞆を忘れた凜世と、上着を忘れた彼。

なんとなしに——お揃いだ、と。

大したことでは無い筈なのに、まるで示し合わせたような出来事に、得も言われぬ心地して。

太陽のような暖かさが、じわりと胸を満たしていく感覚に、つい幸せな気持ちになった。

そんな心持ちで、凜世はスーツの肩の辺りを持つと、軽く広げてみる。若干シワが付いてはいるものの、しっかりと仕付けられ、折り目が綺麗になっている。見られて恥ずかしくないよう、気を遣っているのだろう。アイドルのプロデューサーなら、なおのこと気を遣うのだろう。

そういう彼の努力に気付くと、当然のことながら——彼が『大人』なのだと思ってしまう。

そしてそれは、己より大きな上着を見ても、一目瞭然のことで。

それが少しだけ、寂しく思う。

凜世の人生は、彼と出会ったことで変わった。

彼と出会って、アイドルの道に進んだ。最初は彼に嬉しいと感じてほしくて。そして今は、彼もグループのメンバーも、そしてファンの皆さんも——自分自身すらも胸を踊らせるような、そんな存在でありたいと。

後悔はない。

前までの人生を、恋しいと思ったことはあれど、自らの選択を悔いたことはない。

けれど。

ふと、思うときがある。

もし彼と出会って、アイドルに成らず——けれど彼だけの『特別』であれたのなら。

都合の良い妄想であったとしても、もし彼のもっと近くに居られるような、そんな『もしも』があつたなら。

『大人』である彼と、『少女』^{アイドル}のままの自分。

『大人』である彼と、『対等』で居られる自分。

——どちらが、良いのだろう。

否——どちらが、心地好いだろう。

そう、考えてしまう。

「……………」

広げたスーツを、丁寧に折っていく。

襟を揃えて、腕を優しく、シワにならないように胴の方へと折って、軽く自身の胸で抱えるようにして——。

——気が、迷つたのだろう。

あるいは、魔が差した。

感傷的な妄想に浸って、物悲しい気分だったのだろう。胸に気分の悪い、わだかまりを覚えて、不安だった。

だから。

凜世はゆつくりと——彼のスーツに顔を近付けた。

折り畳んだスーツは襟を此方に向けていた。もし彼が着ていたのなら、正面から向かい合っていて——顔を上げれば、すぐそこには彼の顔があるのだと。そんなことを考えていると、優しい植物のような香りが漂った。

香水だろう。事務所は女性ばかりだから、あまり強い匂いのしない物を……なんて気にしているのかもしれない。そんなことを思いながら……鼻を寄せた。

柔らかい植物の香りのなかに——少しだけ、汗の匂いがした。

……これが、殿方の——。

きつと嗅いでいて気持ちの良い物ではないのだろう。けれどそれが彼の匂いだと思うと、途端に恋しくて、胸が塞がれたように痛んで、

胸の鼓動が早鐘を打つ。

気付けば口が開いていて、浅い呼吸を繰り返していた。火照った頬の温度が、そのまま唇から漏れだして、喉が乾いて仕方がない。

……なんて、はしたないことを……。

こんな、殿方の服の匂いを嗅いで、顔を赤くする自分を誰かが見たら、きつと驚いて、次いで幻滅するかもしれない。それがこのスーツの持ち主であれば——きつと立ち直れないかもしれない。

それなのに、止まらない。

軽く顔を上げて周りを確認するのも億劫なほど、両手に持ったそれに、気をやってしまっていた。

——両の腕で、抱き締める。

つい先程まで、シワが付かないよう気を付けたスーツは、凜世の両の腕の間で細くなっていった。やってしまったと、という後悔の声は、既に凜世の荒くなった鼻息で耳に届くことはなかった。

しばらくして、次第に足元が覚束なくなってきた。立ち上がった状態から、ゆつくりと膝を曲げていき、遂には尻が足裏に着く。いつの間にか内股を擦り合わせるようにして、中途半端に重なった膝に、スーツの裾が載った。

スーツを抱き締めながら、身じろぎする。もうスーツの匂いを自らに擦り付けているのか、あるいは自らの匂いをスーツに擦り付けているのか分からなかった。

そうしていると、ふと意識が途切れそうになる予兆がする。まるで眠りにつく前の微睡みのように心地よく、身を振よじらせるほどの快感が、遠くから迫ってくるようだった。

「——ぷろ……でゅーさー……さま」

線香花火のように小さな火花が、まぶたの裏でパチパチと音を鳴らし、次第に大きくなっていく。臍へその下の辺りが熱を帯びてきた。それをどうにか抑えようと、両の太股が抵抗して膝を動かすが、それを笑うかのように切なく胎動する下腹部と、それに伴う無力感が一層、快感の波を強くした。

「——あなた……さまあ、りんぜ……はあ……——」

襟の裏に顔を押し付け、くぐもった声で彼を呼ぶ。火花は既に視界を覆い尽くすように大きくなつて、怖くなつて眼を瞑つても、まぶた瞼に焦げ付いた光は、何度も淡く瞬いていく。

そして鼻孔をくすぐ擦る彼の匂いがふと強く感じられたと思えば、まるですぐ近くに、吐息が触れるほど近くに、彼がいて、見られているような、そんな気配を、不意に、感じて。

——体が、跳ねた。

まるで壊れた機械のようにブルブルという振動が、腰の辺りから背中を抜けたと思えば、一瞬にして思考が真っ白になる。体が不自然な力を入れて、腰が引けていき、次いで電流が流れたように足が震えて、その時には背中を抜けた振動が体を動かす。

比喩なく、体が波打った。

その波に伴うように、数度小さな波が、小刻みに体を襲った。その小さな波を抑えようとすると、次の瞬間には一分強くなつて下腹部を震わせた。

まるで嵐が過ぎ去るのを膝を抱えて待つように、体の熱が収まるのを、ただぼんやりとした意識で待つていた。ふわふわとした高揚感に包まれながら、部屋の空気が頬を火照りを冷ますのを感じて。

「……………？ ……あ」

そんな間抜けな声と共に、飛んでいた意識が現れる。

当然のことながら、凜世の目の前にはスーツの襟が目前にあった。既にシワが付いてしまったのは言わずもがな。見れば首襟の裏の辺りが何かで滲んだように色が濃くなつていて——それが自身の吐息で、そしてあまりの恐怖に襟を唇で一食《は》んだ際に付いた湿気に気付いて。

「……………っ!!」

正気が、戻る。

途端に、興奮ではなく、羞恥によって顔が紅潮し、勢い良く立ち上がる。すぐに立ち眩みが凜世を襲い、倒れそうになるのをプロデューサーの椅子に捕まることで事なきを得た。

そうして冷めて、そして醒めた思考が、先程までの自身の行いを省

みて、そのあまりの恥ずかしさに、声にならない声が出て。

「——おーい、凜世。鞆あつたか——大丈夫か凜世っ!!」

かちやりというドアノブをひねる音と共に、入ってきたプロデューサーが此方に駆けつけるのを見て、更に体が大きく跳ねた。

「あ、これは、そのっ」

「ああ……すまない、大きな声だして悪かった。それより大丈夫か？

倒れそうになってたが……顔も随分赤いぞ」

「い、いえ、その……しよ、少々立ち眩みが……」

「……貧血か？ 季節の変わり目だし、体に負担が——いや、今考えることじゃないな。取り敢えず、立てるか？ 病院とか——」

「い、いえ、そのような大事では……は、春には、良くあることで、ごさいます……」

「そうなのか？ ……でも、無理は駄目だ。明日は土曜で学校も仕事もないし、ゆっくり寝て過ごすんだぞ。あんまり酷いようだったら、ちゃんとやってくれ。大事な体なんだから」

「は、い……ありがとう、ごさいます」

凜世はそつと息を吐いた。

突然の事だったが、上手く取り繕えたと思う。彼に嘘をつくことに僅かばかりの罪悪感があつたが——貴方のスーツを嗅いでたら、興奮して倒れそうになったなどと、そんなことを言う訳にもいかなかった。

「取り敢えず寮に戻ろう。今日は車で送るから……立てるか？」

そう言われ、足に力を入れる。が、未だに小刻みに震える足が言うことを聞く事はなく、へたりと腰を地面に落ちそうになるのを、彼に支えられながら、そのままゆっくり腰を降ろした。

事務所のフローリングに自棄にひんやりとされていて——その冷たさが、己の穿いたストッキングが濡れているからだと気付いて、また顔が熱くなった。

「だ、大丈夫か？」

「い、いえ……お気遣いが、ありがたく……」

「そうか……立つのは、ちよつと無理そうだな。肩を……いや、それも

難しいか」

彼はそう言うと、少し悩んで。

「……ごめん、後で怒ってくれ」

「？なにを——っ!？」

言い終える前に、抱き上げられた。

片方の腕を膝裏に、もう片方の腕を背中に回して体を起こされ、そのまま抱き上げられる。すっぽりと腕の中に収まって——結構、力持ちなんだなんて——場違いなことを考えて、すぐに現状に気付いて慌てた。

「そ、の。プロデューサーさま。こ、これは……」

「あ、いや、咄嗟にというか……良く考えたら、背負えば良かったなど、若干後悔してる」

「り、凜世は……構いません」

「そ、それなら良かった……って、俺のスーツ……探してくれたのか？

ならそのまま、落とさないよう持つてくれないか？」

そう言つて歩き出した彼の顔を下から覗き込みながら、凜世は気恥ずかしくなつて顔を背けた。

つい先程の自分の行いを考えて、彼に合わせる顔などなく、それこそ顔を何かで隠してしまいたいそうになるが、持っているものとなると彼のスーツくらいで——凜世は何かを振り切るかのように顔を背けたのだった。